

# 会報 14号

# 函館

函館の歴史的風土を守る会会報

№14 S 58.5.22 発行

発行所 函館の歴史的風土を守る会

印刷所 双葉印刷所

## 「復活聖堂」の重要文化財に 指定されるにあたって

函館ハリストス正教会役員 中 居 真 行

いろいろな方々のご尽力によって、函館ハリストス正教会の「復活聖堂」が近く国の重要文化財に指定される見込みとなり、大変うれしく思うと同時に、関係の皆様方に心から厚くお礼を申し上げたいと思います。

教会は本来、信徒にとって「霊」の家であります。とするならば、自分達の家は自分達の手で守り、そして子孫に伝えて行くのが本当だと思っております。しかし、函館の復活聖堂は信徒以外の方達からも、というよりも国家的にも文化財として価値あるものだと思われようになりました。そこで私達は、この偉大なる遺産を、信者のためばかりではなく一般の市民や国民のためにも残さなければいけないのではなかろうかという考え方から、国の重要文化財指定への道を選んだのでありますが、こんなに早く指定への道が開けたことは、本当によろこばしいことです。

一日も早く指定を受けて修復をして、後世へ伝え残す手だてとともに、

きれいな聖堂に生まれ変わって函館の皆さん方に少しでもお役に立てる日の早からんことを心待ちにしているこの頃であります。

函館ハリストス正教会は、東京神田駿河台にある有名なニコライ堂に本部を置く「日本ハリストス正教会教団」に包括されているギリシャ正教の教会であります。

世界のキリスト教は三つの主要な教会に分けることが出来ます。一つはご存じのローマカトリック教会、もう一つは宗教改革の結果生じたいろいろなプロテスタント教会、そして正教会の三つです。日本ハリストス正教会はその名のおり正教会に属して居ります。

「光は東方から」キリストは東方の地、ユダヤに生まれ一生をユダヤで送ったことは常識となっておりますが、そこで人類の救いの事業を完成して教会の基礎を置き、そこ

を中心としてキリスト教は世界に広まって行ったのですが、正教会はユダヤの地からギリシャ文化の世界にキリストの教えが広がってギリシャ正教となり、さらに10世紀にスラブ地域からロシアの広大な地域に受け入れられて広まり、ロシア正教を形成



小林 吉男 氏 撮影

したのであります。

日本へ正教会が入って来たコースは前述のロシアからであります。このため日本ではギリシャ正教のことを一名ロ



シア正教とも云われて居ります。

この正教会は1861(文久元年)年、ロシアの青年宣教師後の日本正教会の生みの親であり、東京神田ニコライ堂で有名な使徒、大主教聖ニコライの偉大なる信仰と情熱によって、北海道の函館(当時は箱館)に最初に伝えられたのであります。

しかし、実際の正教会の函館上陸はそれ以前にありました。それは1858(安政5年)年であります。当時ロシアでは正教会が国の宗教となっており、ロシア政府は外国に設置する大使館、公使館、領事館等には必ず司祭を派遣して館員に教会の規則を行なわせる規定がありました。1854年に調印されました日露和親条約によって函館に開設されることになっていたロシア領事館に、1858年(安政5年)に着任した初代領事ゴスケヴィッチは宣教師(司祭イオアン・マアホフ師)を連れて来て居ります。しかし、この宣教師は館員のみを対象として宗教活動をして居たものであり日本への真の意味の正教の上陸は1861年(文久元年)ニコライ師が領事館付司祭として函館に着任した時とする考え方を日本正教会はとって居ります。何故ならば、それは聖ニコライが領事館員のみを対象とせず、日本国民に対しての伝道の決意をもって着任したからであります。

ただ聖堂は、領事館付属聖堂としてニコライ師の着任以前(現在の元町教会所在地)に建てられて居り、その建立年は1859年(安政6年)とされて居ります。

これが日本における最初の正教会の聖堂であります。

当時の聖堂を知る資料は余りありませんが、木造の一部2階建て、約50坪程ということですが、内部は円天井を持つビザンチン式建築の様式で、内部はイコン(聖像)をはじめ大変立派なものの様でした。また平面図的に見ますと十字形をしていたとの事です。

この聖堂は明治5年(1872年)のロシア領事館が廃止(東京に公使館開設のため)と共に、日本正教会に移管され、これがわが国最初の正教会の聖堂となったものであります。

以来、明治40年(1907年)の函館大火で焼失するまでの約50年間、鐘樓に下げられた大小6箇の鐘が、時には上磯までも聞えたという位大きな音を響かせて居たそうで、その鐘のせいでしょうか。この教会はガンガン寺とよばれて市民に親しまれて来たものであります。

明治40年(1907年)の火災による聖堂の焼失は函館正教会に数年間不自由な教会活動を強いる結果となりました。

函館教会では聖堂再建のために募金運動をはじめ、特に地元では「米のひと握り」寄付運動を起したのですが、資金が仲々集まらず一時は再建が危ぶまれたということです。この話を伝え聞いた篤信のロシアの老婦人から当時のお金で4万ルーブル(現在の4万ルーブルは約1,600万円位で

す。しかし当時の4万ルーブルと云えば巨額なお金であったと思います)を寄付があり、それが元となって現在の聖堂が再建されたとのことであります。

大正2年(1913年)の着工、大正5年10月15日(1916年)に完成の式典(教会では成聖式という)が盛大に行なわれたとのことです。

この聖堂は以前と異なり木造ではなく、レンガ造りですが、平面図的にはやはり十字形をして居ります。

正教会の聖堂は平面図的には基本的な形が決められて居ります。

- (1)十字形 (2)舟形 (3)八角形(星形)  
(4)円型の4種類です。

それぞれ意味があるのですが、日本では十字形が一番多いように思います。

勿論十字形は、キリスト教の十字架による救いを意味して居ります。

それにしてもこの極めてエキゾチックな様式の聖堂は外人の手によって造られたのではないかと思われるかも知れませんが、実は内部のイコン(聖像)を除き設計・施工・棟梁・煉瓦・石工・左官等すべて日本人の手によるものであります。当然、ロシアの聖堂を参考にしたものだとは思いますが、でもこれは大変素晴らしい聖堂であります。

私は先年機会がありまして、ロシア、ギリシャに行き、各地の多くの聖堂を訪問して来ましたが、函館教会の聖堂のようにすっきりとして簡素なしかもあのように形の整った聖堂を見たことがありませんでした。

この素晴らしさが信仰に直接関係のない市民の方や、いろいろな方々に愛されて来たのではないでしょう。

そして、それがそのまま国の重要文化財指定の道につながったものと思われま。

「歴史的風土を守る会」の会員をはじめ、この教会に特別な愛情とご支援を下された方々に心から厚くお礼を申し上げます。

私達はこの偉大なる祖先の残してくれた素晴らしい遺産をいつまでも後世に伝えて行かなければならない使命を持って居ります。皆様方のこれからのご支援もお願いいたしますと思っております。

しかし、私達は常日頃聖堂という建造物で市民にお役に立つということではなく、教会が本来持って居なければならない「中味」で皆様に愛され、お役に立ちたいものだと念じて居ります。

#### 〔参考〕

「ハリストス」はギリシャ語から日本語に訳したもので英語から訳した「キリスト」と同じです。

# 生きているハリストス正教会

作家 木下 順一

日本の歴史も幕末になると、謎が多くなる。しかしそれは古代の謎と違うから、時間をかけると、姿をみせぬともかぎらぬ。

たとえば箱館戦争をどう位置づけるか。北海道共和国とは本当にあったのか。もしあったとすれば、榎本武揚の意識構造に、ヨーロッパの自治体の概念、あるいはジャンジック・ルソーの思想が、どんなふうに影響していたのか。

こういうことにしても、謎のまま。そして謎は多い方が面白いが、謎といえ、元町にあるハリストス正教の建物もそうだ。

いつ誰がどれだけの金を使って作ったかということは調べれば判ることで、そんな事には私は興味はない。又その様式にも関心はない。見て、面白いとか、変っているとかで十分で、私が謎として興味を持っているのは、今もここには司祭がいて、信者がいるということだ。

私はギリシャ正教の教えなるものについて盲人同様に、

ドストエフスキイの小説を通じて、その雰囲気を知るのみだが、ローマンカトリック教と違って、はるかに源始キリスト教的色彩が強いように思っている。そういう宗教が幕末に箱館に這入って、ともかく信者を獲得したが、それはどこが成功の原因だろうか。

こういう謎は自分で解くべきもので、私はいつもかかる疑問を抱きながら、この教会を眺めている。すると四つの塔が歴史的妖怪の象徴のように見えてくる。普通、文化財とかそれに近い建物は、大概役目を終っている。しかしこの教会は今も現役で、信者たちは日曜ごとに集まってお祈りしている。建物もまだ生きているのだ。生きていると思っただけで見るから、この建物は面白いのだ。遺物でなく、生きていると思うから、信仰のない私は中には入れない。そんな怖れを私は持っている。

かりに中へ這入ったら、二度と出てこれなくなるかもしれない。信仰とはそういうものだろう。

## 心のふるさと 函館山の自然と歴史

函館植物研究会会長 宗 像 英雄

### 守られたふるさとの山

函館は天然の良港に恵まれ、海運によって発展してきた。一世の豪商・高田屋嘉兵衛が活躍の本拠とした港街であり明治から昭和にかけては北洋漁業の基地として股賑を極めた都市でもある。1859(安政6年)年、横浜、長崎とともにわが国最初の貿易港として、欧米文化流入の窓口ともなった港街である。

東洋のジブラルタルともいわれる天然の良港は函館山の成立によって生まれた。この山は津軽海峡に突き出た、標高僅か334m、周囲約10kmの小さな丘陵である。低いながらも海に突き出ているため、頂上からの展望には恵まれ、市街地を狭んで北側には亀田山脈のえんえんと連なる丘陵を指呼の間に一望でき、南は青海原を隔てて津軽、下北両半島の山並を望むことができる。

この展望に優れた地の利は、そのまま軍略上の要地でもあった。1899(明治32)年以來、軍の要塞として一般人の立ち入りが禁止され、終戦までの半世紀の間、黒いペール

覆われていた。

戦後、市は車道を建設、山頂からの夜景を香港、ナポリと並ぶ世界三大夜景として売り出した。扇形に広がる灯の海は確かに見事である。が、見晴るかす四田の山の緑と海の青さ、加えて函館山自体の深々と茂った森林のたたずまい、これまた夜景に劣らぬ素晴らしい景観である。山裾の薄幸の詩人・石川啄木がこよなく愛した立待岬には啄木一族の墓があり、近くには与謝野寛・晶子夫妻の歌碑もあって、訪れる人は後を絶たない。箱館戦争に倒れた土方歳三らをまつる碧血碑、外人墓地、ハリストス正教会、ジョン・ミルン夫妻の墓碑など、函館の歩みを物語る史蹟の多くはこの山の山麓にあって、夜景とともに市の観光資源として脚光を浴びている。函館山の価値は観光資源としてばかりではない。市街地の何処からとも望まれる緑の丘、それが要塞であろうとなかろうと、昔から市民は四季おりおりの移ろいを眺めてきた。人々はいふ、「山に雲が懸っていたら雨具を忘れるな」、「山に紅葉が兆したら漬け物の仕度だ」、「山に雪が残っているうちは公園の桜もまだだろ



ろう」といった具合に、人々の暮らしに深く根ざしてきたふるさとの山である。

そしてまた、函館山の自然の豊かさも貴重な存在であろう。地図の上では一点に過ぎない小さい丘陵に、北海道の植物約2千種の3分の1に当る600余種が所狭しと茂っている。南北両要素が濃厚に混生していることや地形的に多様な環境に恵まれている上に、半世紀の間、軍の要塞として人為的に保護されてきたからであろう。植物の宝庫は必然的に野鳥の楽園でもあり、海峡を南下北上する渡り島の恰格の休息地となっている。

### 日本の植物学を育てた山

函館山植物の近代的研究の第一歩は、1854(安政元)年来航したペリー艦隊の調査であろう。函館山及び周辺での採集品は、翌年来航したロジャース艦隊のライトの採集品とともにハーバード大学のア・グレイに届けられ、グレイの「北米と東亜にまたがる植物分布論」、いわゆる「温帯林隔離分布説」の主要な資料となった。また、英領事ホジソンをはじめ、欧米人たちの採集品がそれぞれの本国に送られ、植物や昆虫の新種が発表されている。一例を挙げると、函館山の初秋を飾る黄花のトウゲブキ、その学名に採集者ホジソンの名が種小名「ホジソニー」として記念されている。

それらの人々を遙かに凌いで日本の植物学に大きな貢献をもたらしたのがマクシーモウィッチ(以下マ氏と略称)である。彼は沿海州のフロラを調査して「アムール地方植物誌」を出版、デミドフ科学賞を受賞するなど、当時既に一流の植物学者に伍していた。1860(万延元)年箱館来航、目的は大陸と日本列島との植物分布上の関連解明にあった。箱館滞在1年2カ月、下僕として雇った青年須川長之助を助手として訓練し、函館山は勿論、近郊一円を計画的に調査、更に長之助を伴って横浜、長崎と採集行を続け、1864(元治元)年ロシアへ帰国。以後もアナトリー神父を通じて長之助に各地の採集を依頼し、長之助の足跡は九州にまで及び、その採集品は総てマ氏に送られた。マ氏は大量の標本を検討し、1891(明治24)年の死に至るまで、日本及東亜に関する研究を続々と発表し続けた。日本の植物の20分の1に当る300余種がマ氏によって命名されている。

日本植物学の黎明期に活躍した牧野富太郎らをはじめ多くの植物学者達はマ氏に標本を送って指導を仰いだ。後に北方植物の権威といわれた宮部金吾博士のごときは米国留学の帰途、露都にマ氏を訪ねて2週間も寄寓し、つぶさに教えを受けたという。マ氏が今日もなお「東亜植物学の父」と敬称されているのも当然であろう。マ氏の研究を、手足となって助けた長之助の功績もまた大いに称讃されなければ

ならない。

### 世界に注目された新学説

函館山の頂上にブラキストンの来航100年を記念した碑(本郷新氏作)が建っている。そこから展望される津軽海峡が動物地理学上「ブラキストン線」と呼称されていることは広く知られている。陸上動物の多くは海峡によって移動が阻止される場合が多い。この点に着目して、日本列島における動物の分布を最初に論じたのがブラキストンの「日本列島と大陸の古代における連系を示す動物学上の徴候」という論文で、1883(明治16)年の発表である。北方大陸系と本州系の大型哺乳類と留鳥の分布が津軽海峡を境として際立って異るのは、かつて、樺太と北海道が大陸と陸続きで、海峡を狭んで本州と対峙していた時代があったから、という論旨である。それで「樺太蝦夷半島説」ともいう。

ブラキストンは1861(文久元)年、箱館に来航して3カ月滞在、その翌々年、夫人を伴って再度来航、新居を構えて各種の事業を開始した。蒸気力による日本最初の製材業をはじめ、運輸貿易、製氷、気象観測、上水道計画等々、箱館の近代化へ向けて、彼が直接間接に関与し指導しなかったものはなかったといってよいほど八面六臂の活躍をした。更にその間、函館山は勿論、道東・道北にまで探査の足を運んで鳥獣を観察、その報文を学界誌に屢々発表、また標本を英仏の博物館へ寄贈するなど、事業と探険にかけての旺盛な意欲と不屈の闘魂はまさに超人的であった。

しかし、その間、夫人は孤独に耐えかねて帰国、彼の事業も幕府の崩壊、新政府の樹立、箱館戦争という激動する世相に加えて開拓使の無理解などもあって、必ずしも順調ではなかった。箱館滞在20年、数々の偉大な業績を残しながら、1883(明治16)年、彼自身は新たな冒険を求めて米国へ向け、孤影消然と函館を去る。

### 押し寄せた欧米文化の波

箱館における欧米文化の影響は記すべきことがあまりに多い。中川五郎治の日本最初の種痘、木津孝吉の写真術の開拓、続豊治の洋船建造、レーマンの指導による横山松三郎の洋画の開拓、露領事ゴ氏の病院建設、カシヨンの仏語学校開設、ニコライ大司教の露語普及など。幕末から明治への短期間に津浪のように押し寄せた欧米文化の波を、胸を張ってドンと受けとめていた当時を思うと、綾なす錦繡にも似た絢爛たる革命の日夜であったろうと感慨もひとしおである。

わが函館山は厳然と鎮座し、その変転のすさまじさを、じっと瞰下していたにちがいない。

(TOMORROW'S 168より転載)



## 教会建築のビザンチン様式

函館ハリストス正教会前司祭 厨 川 勇

花過ぎて若葉青葉香る頃、朝の陽光を浴びて輝き、夏の真昼抜けるような青空に輪郭を際立たせ、山が色づく秋の夕映えの茜色に鋭いシルエットを限り、片側に雪をつけてマラカイトグリンの色調を一きわ鮮かに見せる。そんな風情が函館の元町辺りを散策する人たちに、ロマンと言うのか、何かしら、或種の感じを抱かせるような教会の建物である。近くに寄れば時の流れを、一入感じさせる態の、痛んで穢れた壁面も、朝明け、夕焼にはピンク色に映え、周囲の緑が色ませば、純白にも見える。奇異にも見えようけれど、夢をもたせるのは玉葱型のドームである。いくつも聳えるドームである。「あ、これがビザンチンか。」と背づきたくなるハリストス教会だが、実はこの外貌こそ、ビザンチン様式とは全く無関係な、むしろビザンチン様式を否定するものと、一部の人には考えられている外観なのである。

キリスト教の教会堂の原形を探ねれば、所謂の旧約時代にまで溯らなければならない。有名なセシル・B・デミル監督が、白黒とカラーと二度までも製作した大作「十戒」の主人公モーゼが、ヘブライ人をエジプトの桎梏から解放し、その祖先の地である現在のパレスチナまでの大旅行の途次、神から「十戒」を授かるのだが、この映画の中では語られていない事の一つに、教会堂の様式がある。堂と言っても旅行中のことであるから、今の言い方では可搬式のものであるが、その設計・規模は神の啓示によると言う。組立・分解できる柱・梁などの骨格となる部分は含歛木で造られ、壁・屋根など被覆する部分は麻で織った布の幕である。幕屋・会幕などと訳されているが、英語では tabernacle である。詳細は旧約聖書の第二篇「出エジプト記」の第26章に記され、寸法はヘブライ人が用いていたキュビットと言う単位で表わされているが、現今の単位に直せば間口22メートル30センチ・奥行44メートル60センチほどの長方形である。後世になって、ソロモン王がエルサレムに建立した本格的な殿と称される堂も、その後ヘロデが再建したものも大たいこの規模であったと伝えられる。この長方形は、ギリシャ・ローマで行なわれたバシリカと言われる様式の平面の形なのである。切妻型の屋根を多くの列柱で支えた長方形の建物はギリシャ・ローマだけでなく、現在でも各種の建築物に見られる様式である。ローマのサン・ペトロ、ヴェニスサン・マルコ、パリのノートルダムに見られるとおりである。初期の典型的なものとしては、

アポリナーレ・タオヴォが有名である。

キリスト教的な時代区別で言えば、新約時代(キリスト在世以後)の初期に至って、バシリカとは対照的な集中式と呼びなされる形の堂が建てられるようになる。集中式と言う様式の特徴はその平面が円形・正八角形などのもので古代ギリシャ・ローマでは神殿・墓廟・記念堂さては浴室などにも用いられていた。初期キリスト教徒も円形とか正多角形がもつ記念的性格を賞用したものらしく、エルサレムの聖墳墓上の円形の大聖堂や、アンテオケの大八角堂などが建立されている。この様式ではサン・ヴィターレが有名である。

建築史家の吉川逸治氏は「円堂形式の精神的な意義は高く、実施の際の技術上の困難を超えて円蓋架構を行ない、特に注目すべきは、円形や八角形の周壁の上に円蓋を築く方式のほかに、ペルシャ系の伝承である正方形の平面の上に円蓋をのせる方式を、ビザンチン建築に採り入れた。」とされる。柳宗玄氏は「四世紀以後ビザンチン特有の建築が発達するが、まず、バシリカの軀幹部を円屋根(半円ヴォールト)で覆う技法が発達し、さらに円蓋(ドーム)をいただくバシリカ建築が現われ、やがてバシリカ様式が次第に捨てられて、発達した集中式構造であるギリシャ十字形の平面をもつのが主流を占めるようになる。」と説いている。

ここでビザンチンと言う名称が出てくるが、これはビザンチウムの地名に由来する。現在のイスタンブールのことである。紀元前667年ドーリア人メガラ植民によって発達したギリシャのポリス(都市国家(の一つでギリシャ名はビザンチオンである。紀元330年コンスタンチヌ大帝がここを東の都と定め、地名をコンスタンチノープルと改めるが、文化関係の名称にはビザンチンを冠して今日に及んでいる。ここを中心に発達した様式をビザンチンと呼ぶのである。

キリスト教者の聖典新約聖書の第1篇はマタイ伝と呼ばれている。その第5章の48節に「なんじら純全なること、なんじらの天の父の純全なるが如くなれ。」とキリストのことばがある。純全とは完全である。これがキリスト教者の理想である。完全を具象化した平面図形は円であり、立体では球である。記号として円を使う場合を考えてみても、最も日常的なそして普遍的なものであることが解る。祈りの場所、最も神聖な所の象徴として半球形の円蓋を掲げるという着想は、吉川逸治氏の「円堂形式の精神的な意義は



高く」と言う解説に表われている。しかし堂の用途からの要求であるアプス（サンクチュアリー）・ネーブ（祈る人の立つ処）・ナルテックス（出入口の控えの間）と縦に配置される長方形の平面の上に円蓋を被せるのは技術的には極めて困難なのであるが、それを乗り越えたのは精神的な高さの欲求であったと言い得る。ネーブの上を覆う円蓋は互いに向い合う四点でその重量を受けられる。それを荷うため四方にアーチが設けられるが、これは厚いものでなければ耐えられない。従って半円の屋根をもった室が四方に伸びることになり、建物の平面全体の形としては、縦横の等しい俗に言うギリシャ十字形を形づくることになる。バシリカの長方形はノアの箱舟、集中式の円形は地球・宇宙、ビザンチン十字形はキリストのかけられた十字架を象徴するということが聖堂の三つの型とされる。

ビザンチン様式の定義は、円蓋つまり半球面の天井をもった、等端十字架の平面の建物ということになる。純粹のビザンチン様式では、天井の球面はそのまま屋根として外部に

表はれている。今や回教の寺院として使用されているが、イスタンブールのハギヤソフィヤの大聖堂は、ビザンチン様式の最古・最大のものである。我が国では東京の神田駿河台にある俗称ニコライ堂が唯一のものである。

キリスト教が黒海の東西両岸から、現在のソビエト連邦の地域、言い換えれば雪の多い地方に入ると、円蓋を外に表わす屋根は適しない。そこでテント形の急傾斜をもった屋根を架けることになるが、球形のものを屋上に装架する発想から、オリエントの調子の玉葱型の所謂オニオンドームを装架することになる。結果外観ではもはやビザンチンの円蓋を見ることはできない。依りてロシアに入って教会建築のビザンチン様式は消滅したとさえ言われる。然し半球形の円天井が内部に装架されている限り、ビザンチンの精神は完全に伝承されているのである。それに日本の要素も加えられ、日本のロシア風ビザンチン様式の聖堂が諸所に建てられているのである。



明治40年焼失前のハリストス正教会  
(ハリストス正教会提供)

函館の歴史的風土を 尋ね・からせ・尋ねる

後集  
後記

長い間の熱意と努力が大きな実を結びました。ハリストス正教会の重文（重要文化財）指定です。おめでとう！ 教会を今日迄支え、これからも教会と共に歩まれる信者の方々とこの喜びを分かちあいたい。今回はこれを祝し、ハリストス特集号をくみました。ゆかりの方々から玉稿頂き感謝いたします。明治期の歴史的建造物の文化財指定に関しましては、すでに国民的合意が形成されております。が、大正期のそれは極めてむずかしいのが今日状況とされております。この意味だけでも大正5年建立の同教会の重文指定は画期的意義をもっております。来年度から調査及び修復元事業にかかるのですが、数年後の完成が今から心待ちされます。それにしましても国家的事業とはいえ、地元教会側では、かなりの金額を負担しなければならないでしょう。百戸にも満たない信者の方々だけに、この苦難を強いて私共が手を拱ぬいていてよいものなのでしょうか「函館の顔」としてのハリストス正教会が、どれ程市民に愛されてきたのか、否、それ以上に市民にとって、どれだけ（最大限）に利用させて頂いてきたのか、胸が熱く痛くなるのは決して私一人ではない筈です。観光立市をうたう函館市当局、関係業界、そして市民、この三者が一体となって、地元負担金の拠出対策につき検討委員会などがどうかつくられんことを切にこい願っております。

田尻